

九十八 世界と人間の生について 老園丁の未完の廻心 序と第一章

序 試練に遇って始まった廻心

先の『園丁と蝶の対話 認識と言語を巡って』という書き物で、自分という人間を知ろうと、認識と言語をキイワードにして学習し考察した。わたしは、その思索によって世界と人間について理解が深まった、ひとまずの到着点にたどり着けたと思っていた。しかし、二〇二〇年に遭遇した試練によってその思いこみは無残にも打ち砕かれた。その挫折は、先の思索が不十分だったことを明らかにした。

立ち直るためには、何が足りなかったかをよく知ることが必要である。ふりかえってみよう。試練は前立腺癌が見つかって始まった。身近にこの病気で死んだ何人かを見ていたので、ある程度の知識があった。初期段階なら前立腺全部を切り取るのが有力な治療法である。わたしは迷わずその手術を受けた。二月末のことである。しかし、統計は個々の事例に直接当てはまるわけではない。まれな重度の後遺症が日常生活に支障をきたし、それ

が自律神経を失調させて、しだいに深刻な心身症に陥った。あれこれ考え睡眠薬などではなく眠れず、精神不安定になり、疑似的な胃・十二指腸炎の症状が生じ、体重減少の恐れから栄養補助剤をとりすぎて糖尿病まで発症した。関連したそれらの副次的症状が困難を深めていった。

現実に見られる身心の症状に苦しみながら、他方で頭は少し働くから、後遺症がひどいといっても精神が太く出来てさえいたらやり過ごすことができないわけではない、と思う。家族もそう言う。そして、実際にわたしよりも困難なさまざまな障害をこうむった人が立派に生きている姿を目撃するにつけ、自分のふがいなさを思い知らされる。明らかに、わたしは生き方に未熟なのだ。死の恐怖に直面したのでもないのにこんな状態である。これまで亡くなる人を何人も見てきたが、内心を知ることにはできないにしても、これほどの身心の不調におちいった人を見たことがない。わたしは、世界について人生について、生死について何も分かっていないということを痛切に思い知らされた。問題は理論的な面だけではないのだと思ひ至る

つらい日々を過ごすなかでこういうことを考えないではおれない。身心不調なので考えは前進するはずもないのだが、もしさいわい回復したらもう一度自分をつくり直さなければいけない、という思いは離れない。後遺症は通常一年ぐらいのリハビリテーションで改

善するとされていて、その一般的な指示に従うしかない。悶々たる思いは長期間続いた。しかし、手術直後の状態から直感したとおりにいつこう改善しなかった。心身症はむしろひどくなり、わたし自身がそれを望み、医者も早めに対処せざるをえなくなった。そうして、最初の手術から七か月後、身心の状態が最低と思われるころ、人工括約筋埋めこみ手術を受けた。二度目の手術では予期せぬ皮下出血が大きな腫れをもたらし、入院は二十日間に及んだ。十キログラム痩せ平静でない状態で日を過ごしたが、それもまた自分の未熟さを突きつける。この手術の効果は一月半余りあとでないと分からないので、その後も心労は続いた。

二度目の入院では娘が、自律神経失調を改善するために、『自律神経を整える写経』という本を持たせた。「般若心経」を三十一日分に分けて、毎日短い句を四度書写するようになっていた。上半身を少し起こしたベッドの上で、鉛筆で仰向けに書いた。これが再起を模索する修養事始めとなった。

しかし、頭が働かないなかでも、「般若心経」の論理に疑問が湧く。二月の手術の前と後で、この世界でこの身が遭遇する出来事が、元どおりにできないこととして起きることを、初めてのように痛切に悟ったとき、わたしのわずかな知識が何の力も持たないことを

知らされた。「色即是空」はカントの認識論につながるものと理解できるけれども、今回の経験から、「色即是空」と頭で知っただけでは、不可思議なこの世界で人間が惑乱せず動じないで生きるのに必要な力は得られないと悟ったのだから、「色即是空」と後半に真言Ⅱ呪として説かれる「般若波羅蜜多」とのあいだには、渡しがたい隔たりがあると考えるをえない。自宅に帰ってから続けた「般若心経」の書写をしながら、その考えは深まった。ゴータマ・シッダールタは生前そのような超越をしなかった、と思う。

このように回顧するのは、わたしの廻心がどのように始まったかに触れようとしてのことである。うろろしながらさまざまなことを考えていたということだ。そのころの雑記帳には、――今年の試練によつて改めて人間の生きる力を修得しなければならぬことを知らされたわたしは、修行を重んじたゴータマ・シッダールタの説いたことをもう一度聴かなければならない。偉大な人は「道はわたしたち一人ひとりが自ら歩まねばならないのである」と言っている。たいへん困難だが、自分で模索し修行するほかに道はないのだ――と書いた箇所がある。ここには、実践的な修練が欠けていたことに思い至ったことが告白されている。この立場からすれば、「般若心経」の説く神秘的な力に頼るのではなく、「犀の角のようにただ独り歩め」と説いた人間ゴータマ・シッダールタの生き方に学ぶ道へ進

まなければならぬ。

しかし、目覚めた「ブッダ」としての教説は多いけれども、ゴータマが生存中にどのように身心を修養し覚醒していったかを語る文は少ないように見える。それを探求しなければいけないが、さらに広くほかの賢人にも注目して考えなければならないだろう。わたしは、尊敬する人たちの生き方に学ぶところがあると考え、伝記のようなものも読んでみようと思った。

その一方で、先の考察『園丁と蝶の対話 認識と言語を巡って』によって到着した考えをまったく離れる必要はないだろう、廻心とはカントの到達点から始めようと思っていた。カントが人間の行なう探求の理論的な基礎を築いたという認識を変える必要はないし、その著作中の文章には十分な修養のあとが見える、とわたしは思う。付け加えれば、カントの伝記はいくつかあるようだが、その生き方と著作とを結合させて書いたカッシーラーの『カントの生涯と学説』に勝るものはないだろう。わたしはその書物からカントの実践的な修養を読みとることができていなかったのだ。

要するに、わたしは、病氣と療養の九か月間の深刻な動揺によって、わたしの学んできたことが安心立命とはほど遠かったことを思い知らされたのである。物事に動じずによく

生きる身と心を体得することは容易なことではないのだ。改めて身心の修養が必要なことを痛切に知らされた。わたしは、もう一度人生を経験しなおし、モンテーニュの言う意味で「人生を立派に生きる」身心を修得しなければならぬのだ。老園丁にその難事業にとりくむ時間はあまり残されておらずどこまでたどり着けるか心もとないけれども、なんとかやってみようと思う。

ということで、今度の思索の中心テーマは、先の思索『園丁と蝶の対話 認識と言語を巡って』を越えて、人間がその中で生きる「世界」はどのようなものか、その世界のうちで「人間の生」はどのようなものとしてありえるか、改めて考察することである。さらに、理論的な皮相にとどまらないで、実践的な問題として「世界」と「人間の生」をとらえなおし、成果が自分の身心に具わるような境地に進まなければいけないのである。

その思索をどう進めればよいか名案がない。考えてみれば前のときもそうだった。大きな課題にとりくむのに全体の構想は貧弱だった。ただ以前からあつた関心事を学習して書き進めるうちに、幸運にもなんとか形ができたのである。今回も、とにかく勉強しながら書き進めて、文章がつくりあげていく論理にまかせるしかわたしには方法がない。と言っても、基本的な探求路を構想しておく必要はあるだろう。前の方に書いた病氣療養中に思

い浮かべたことを手がかりに考察を始めることにしよう。そこで考えたことは、昔の人たちがどう考えていたかである。思索は、時間軸に沿ってみれば、文明が発展するなかで生まれた思考法から、哲学や宗教が体系を整える過程でどのような思想が形づくられ、科学の時代になってそれはどう変化したか、という順に進むことになるだろう。

根本にあるのは、生得的に何事も自身の生とからめて考え生きる、という人間の在り方である。人間精神は、「世界」をとらえるときそれを観察するだけで終わることができない。第一章ではこういうことを予備的に考察しよう。その予習が終わったら、第二章で、可能な「世界の見方」を整理し、それでも、「人間の生のとらえ方」によって「世界観」が位置づけなおされ、それに対応する「人生観」が形成されることを第三章で見よう。そして、どういう「安心立命の仕方」があるか第四章にまとめてみよう。そのなかでわたしが得心できる「安心立命」は何かを判断することが、最終章の仕事である。このように考えて、目次に掲げるような五つの章立てになった。この構成が適切なもので上首尾な結果をもたせれば、思索の目的はひとまず達成されることになる。成功を願いながら始めていこう。

*

さて、この書き物の趣旨を説き起こすのにいきなり硬いしかも冗長な文章で始めてしまいました。それほど動揺が激しかったこと、まだ立ち直りの途上にあることを示しています。しかし今回の思索も、カントが常識人に呼びかけた言葉を励ましとするのですから、よくこなれた日本語で分かりやすい語り口にすべきでしょう。ほんとうは、前回のようにまた蝶の莊周さんとの対話形式にしたいのです。ただ今回は、『莊子』が説くことも考えてみたいので、当の莊周さんとの直接対話の形式にすると記述が混乱するかもしれません。そこで、莊周さんへの通信文のように表現して会話体を維持することにしましょう。この一年に起きたことで園丁の老化は進んでいるし、対話で弾みをつけることもできないので軽妙な調子が出ないだろうと危ぶみますが、せいぜい頑張ってみます。

第一章 人間は世界と人間の生をどう見てきたか

Letter No1

　　莊周さん、お元気にお過ごしでしょうか。あなたとの骨の折れるでも楽しい会話をしてからずいぶん時間が経ったように感じています。というのは、あれからわたしにはいろんなことが起きたからです。でも、あなた流に言えばほんのひと時のことだったのでしよう。またお会いして話をしたいのですが、諸般の事情からそれができません。それで、こうして信書を送ることです。わたしの頭に浮かぶことを伝えて、あなたの批判を仰ぎたいと思います。前よりもいつそうわたしの手に余るようなことを書いていくのに驚かれるでしょうが、わたしの夢に現われて、どうぞ、至らないところを指摘してください。

　　蝶でもある莊周さんのことです。わたしは頭の浮かぶことはお見通しで、「序」をもうお読みになったでしょう。「世界」と「人間の生」について、前回よりも深く思索したので、お力をお貸しください。えつ、また厄介をかけるのかですつて。わたしの夢に現われた縁だとあきらめて、おつきあいください。

1 探求の開始

歴史的に人間は世界をどう見てきたか、というところまでさかのぼって考えてみます。原始、文明社会をつくりだした人類は、一般にアニミズムと呼ばれる考え方で世界をとらえていました。自然界に存在するモノに人間の精神活動を投影して、世界は精神的なすなわち霊的な諸物からなる、という見方をしていたように思われます。この考え方は、さまざまな形を変えています。科学の進んだ現代でも残っています。今でも、霊的な場所などという言い方がれっきとした新聞やテレビなどに登場します。古代、霊的なものはしだいに神々として象徴され、それは神話としてひとつながりの体系に整理されていきました。社会が一定の秩序ある構成をするのに対応するのでしょう、神話の体系では神々の位置づけが行なわれています。そして、人間社会の歴史が進展するうちに、神話の信仰はもう少し進化した宗教へ変化していきました。共同体が神殿をつくるようになった段階で、宗教は社会に根を下ろし、人間は、自分の暮らす社会が信じる宗教の考え方で世界をとらえる、というのが当たり前になりました。

宗教が人間精神の反映であることは否定できないとわたしは考えますが、その発生起源

からして神は人格神という本性をもつことになります。他方で、神話の時代から人間は、人間がそのなかにある世界の存在を説明したいと考えました。そうすると、世界がどのようにつくられたかと考えることになり、説明は人間たちが何かをつくる場合に似ることになります。霊的な何者かつまり神々が世界を創造したというイメージが生まれるのは自然の流れと言えます。そして、神々の関係を王が統率する人間社会のように想像することも可能性の高いやり方です。ですから、世界宗教になった宗教は、重要な神を中心に体系化されています。そのなかでも一神教になったユダヤ教は、世界の統一的なとらえ方としては最も整合的な宗教と言えます。そこでは一人の人格神が世界を創造したという見方が強調されることになります。

ここで、あとで関連する点に触れておきましょう。人間がつくる社会はそれぞれの地域の歴史とそれが形成する文化によって特徴づけられるので、それぞれの社会の考え方と宗教は独特な特徴を帯びています。東アジア・南アジア・西アジア・ヨーロッパをくらべれば、その特徴を区別することが可能です。歴史を経るうちに、ヨーロッパと西アジアの宗教はユダヤ教の流れをくむキリスト教とイスラーム教になりましたが、こまかく見れば、それぞれの地域で差があるはずで、東アジアと南アジアでも宗教的な思想は変遷を遂げました。中国ではどちらかといえば合理的な考え方が好まれて宗教色を薄め、インドでは

想像をたくましくすることが好まれて宗教に多様性を持たせたように見えます。

文明社会が発展すると、人間は、古い考え方をつき抜ける思考力を身につけて、物事を綿密に考えることができるようになっていきます。まだ神話が力をもっている時代なのに、宗教とは区別できる理性的なあるいは哲学的なやり方で世界と人間を考えようとする人たちが現われました。

それらの思想を整理するのは容易ではありませんが、次の小節を簡単にするために、この段階の思想を粗く分類しておきましょう。紀元前五世紀ころのインドで、ゴータマ・シッタータが、人間理性の及ぶ範囲内で物事を考えようとしたのは、以後の歴史に照らしてみると画期的なことだったと思います。おおよそ同じころのギリシアに、世界や人生を理性的に考察する多様な哲学者が現われました。そこから、今日までつながるヨーロッパ流の哲学が生まれました。ゴータマとソクラテス・プラトン、世界に正対して考え「よく生きる」という観点で似ているけれども、ギリシアの哲学は魂の存在や世界の永遠性などに言及して、ゴータマほどの「超越」への厳格な断念はありません。同時代の中国には孔丘(孔子)がいました。あの人の「鬼神を語らず」という態度はゴータマの「断念」に対応しています。けれども、孔丘は主に社会・政治・道徳について論じましたから、自然

を含む「世界」のとらえ方という文脈で対比するのに必ずしも適していません。時代がわずかに遅れますが、中国には、伝統的な考え方からはみ出て世界を高めから眺めるような、それでいて合理的であろうとする思想もありました。莊周がそういう思想を代表していることが出来ます。

このような理性的なあるいは学問的な新しい思潮によって、人間精神に広がりや深みをもたらされると、それに応じて宗教は以前よりも洗練されたように見えます。そして、宗教は、共同体もしくは社会生活に慣習として根を下ろしていましたから、人々の考え方の中心に位置するほどの力を保ちました。

ところで、人間の生を、誰しも幸せに生きることを望むという現実をわきに置いて考えることはできません。人間は、自然と人間社会を相手にしてまったく自由に生きることはできず、その生において、自身の精神の働き方がつくりだす制約に強く影響されます。また、人間の心は自己の生死についても思考できるようになっています。それは、生命保存を第一とする本能的活動との葛藤を生みます。人間だけでなく自然界の生き物を観察しても、普遍的な生命の現象は人間に生死の問題を突きつけます。神妙になって生まれる前のことや死んだ後のことを考えようとしても、それを知ることができません。これらのこと

は、ひるがえって世界の見方に影響せざるをえません。世界観は、避けることもできず、人間観にからまるのです。

人間は、その複雑な条件のもとで事態を制御して何かを追究するほかありません。そして、一人ひとりの人間の心はスピノザの言うようにそれぞれの身体の変容ですから、誰しも、身と心が混然一体となつてこの世界であがくことになります。わたしは今度の自分の経験からいっそう痛切にそう考えるようになりました。そういう条件のもとでどのようなよく自分を律すればよいのでしょうか。人間にとってよい生き方は切実な問題としてあるのです。この点も、今考えていることからまってきました。

2 世界観・人間観の三つの祖型

前小節でざっと見てきた世界の見方と人間の生き方を、わたしは、三つの祖型として分類したいと考えます。まず、「超越」を断念する点を重要視してゴータマ・シッダールタの立場をとりだして、「この世界にとどまって世界を見て生き方を模索する」第一の立場とします。そのほかの、宗教とは区別できて、できるだけ理性的に世界と人間の生をとらえようとする「哲学的な」立場をひとくりに第二の分類に入れます。この分類では、ギ

リシアの哲学や中国の合理的思想などは第二の立場ということになります。それから、世界と人間の生を問おうとするとき、長く人々に影響力を保った宗教をはずわけにいきません。それを第三の立場とします。

A この世界にとどまって世界を見る立場

古代、この世界にとどまって世界を見る立場があつた、その観点で最もつきつめた思想がゴータマ・シッダールタにあつた、と考えることにします。わたしは、中村元さんの『ブッダのことば』など一連の原始仏典の翻訳書と解説書、また、W・ラーフラ著『ブッダの説いたこと』を読んだことがあります。序で触れたように、「ブッダ」は目覚めに到達した人という意味ですから、ゴータマをブッダと呼ぶこれらの書物には超越的な思考が含まれていることを示唆していますが、そこにとりあげられた言葉のなかに素朴で一貫している思想を読みとることが出来ます。それは、生前のゴータマの説いたことに違いありません。一例をあげれば、子をなくして苦しむ母親に「村に弔いを出さなかった家があるか尋ねて歩きなさい」と勧めたとあります。ここには神秘的な力に頼る姿勢はないし、直接的な救いの教えもありません。人間がこの世界で経験することをよく観察して、自分で考え

学ぶことを勧めているだけです。これが、「道はわたしたち一人ひとりが自ら歩まねばならない」という言葉の意味だ、とわたしは考えます。

スリランカ生まれの僧でフランスで近代思想も学んだラーフラさんの著作『ブッダの説いたこと』が簡潔でよくまとまっているので、それをたどっていくつかの要点を拾い上げてみましょう。僧であるラーフラさんは、ゴータマが「自分は人間以上の者である」とも、「神あるいは人間以外の力から啓示をうけた」とも主張しなかった、と断言します。ほかの宗教の開祖とは違うということです。さらに、「実践を教える師であり、人を平安と幸福に導く上で役立つ教えのみを説いた」、「信心あるいは信仰ではない」、と言います。わたしの理解では、ゴータマは、人々を救うというようなことは言わず、一言で言えば「人間の生にとりまとう苦しみを克服する生き方」を説いたのです。そして、苦しみからの脱却は、「世界の事物には堅固な実体がなく（諸行無常）、それらの相互作用の広大な連関によって世界と人間の事象が生起する（因縁生起）」という世界認識に到達すれば達成できる、と説きました。基本は、実践的に身をもつてこのことを悟る道を説くとても哲学的な思想だ、と思います。でも莊周さん、すでにお話した体験によって、それがたいへん困難な道だとこの歳になってやっと悟ったのです。

世界認識の理論的な面について、ゴータマは、別の修行者から「魂あるいはアトマン

が存在するか否か」、「世界は永遠か否か、有限か否か」、「魂と肉体は同一か否か」と尋ねられても答えませんでした。この態度は、先の『認識と言語を巡って』で触れましたが、カントが『純粹理性批判』で戒めたこと、人間理性からの超越を断念することに対応すると思います。

あとの考察で役立つ道標として、「この世界についてゴータマが下した判断」を要約して掲げておきたいと思います。

ゴータマ・シッダータの「世界認識」

判断① 自然と人間の事象は変転きわまりなく、そこに堅固な実体はない。

判断② 「アートマンあるいは魂」も実体としての存在ではない。

だから、「魂と肉体は同一か否か」という問いに答えない。

判断③ 「宇宙は永遠か否か」・「宇宙は有限か無限か」という問いに答えない。

このような問いに人間は答えることができない。

判断④ 判断①～③を一般化すれば、「世界を認識しつくすことはできない」という判断または断念が導かれる。

これらの基本的な判断は、「この世界にとどまって世界を見る立場」だということを示しています。人間の認識能力の限界を超えない範囲で、人間に可能な在り方を知って、ふさわしい生き方をするという姿勢になるはずです。この立場にはそれに応じた人生観が伴うでしょう。ゴータマは、この世界をこのようにとらえることを説き、どのように生きるか、生に伴う苦しみをどのようにに脱却するかを実践的に修得するような生き方を勧めたのです。それは、人それぞれの課題だということになるでしょう。もちろん、「原始仏典」には生活を律するやり方や道徳的な指針も説かれています。それはやはり重要でゴータマの思想の特徴が現われていると思いますが、古代インド人の心性や共同体の宗教思想から影響を受けている、と考えなければなりません。これ以上現代の時点から拡大解釈すると、莊周さんにたしなめられる恐れがありますからやめておきましょう。

B 理性を重んじる哲学的な立場

わたしの貧弱な知識によれば、古代ギリシアには古くからさまざまな哲学者が現われて、自然学・数学・論理学・倫理学などに発展する多様な思考を含む広い意味の哲学的な思索を展開しました。ソクラテスは知的に在ることを勧め、プラトンは理念的なイデア論をつ

きつめ、アリストテレスは哲学の総合化をめざしましたが、近世になって再評価されてヨーロッパ哲学に大きな影響を与えたので、今でも世界で影響力のある哲学者です。そのほかに、原子論にたどりついたデモクリトスの唯物論的な自然観に沿って幸福や精神的快を求めるエピクロス学派、自制心強く道徳的・倫理的な幸福を追求したストア学派をはじめとして、多彩な哲学者がいました。こちらでもヨーロッパで理性的に考えようとする知的な人々に永く影響を残しました。

古代のギリシア・ローマにも、神々の信仰がありました。がキリスト教のような強い拘束力がなかったので、概して、その哲学には宗教的な面が希薄だと思えます。そして、自然あるいは世界をなるべく理性的に考察して、心の平安と幸福を求め、生活を律するやり方や道徳的な生き方を追究するという点で、「ブッダのことば」と共通する関心をもち実践的な努力も勧めていると言えるでしょう。ですから、ゴータマを特別に第一の立場にとりだすのは、わたしの入れこみが過ぎるのかもしれませんが。しかし、近代になって認識論の基礎を築いたカントの到達点から出発するわたしには、理性の飛躍のしすぎを戒めてこの世界をきわめて冷静に認識するという点で、ゴータマがカントの先駆者に見えるのです。それと矛盾する言い方になりますが、ギリシア哲学を源流とするヨーロッパの哲学はカントの思想に汲みとられてもいますから、これ以上言及することを省略させていただきます。

このB項に『莊子』の思索も入れたいと思います。このノートでは世界の見方が人間観にまで力を及ぼす莊周さんの考え方にも注目する必要がある、と考えるからです。哲学的なエッセイ集と言える『莊子』全篇を莊周さんが書いたのか疑問視されているけれど、主要な部分を書いたのは、莊周さんあなたなのでしょう？。『莊子』は、世界をとらえるのに、わたしたちの認識能力が誘導する常識的な見方あるいはそこから構成される伝統的な世界観を解体してしまっています。中国にそういう考え方が古くからあり、それを整理した『老子』を継承しているとされています。でも莊周さんあなたは、もっと幅広く世界の諸相を言葉のもつ論理性を尊重しながら考察しているという点で、画期的だと思います。その議論は現代フランスの流派に先駆けて、脱構築的とさえ言うことができます。こう言うところ、ひいきの引き倒しになってしまいうか、莊周さん。とにかく『莊子』は、現代人がおちいりがちな人間中心主義から自由になって「世界」をとらえることを提案します。

莊周さんの考え方は、人間を遠方から客観視するもう一つの態度に導きます。対象の關係性に迫ることの困難な問題について『莊子』の語りは明確さを欠きますが、その言葉は論理を伴っていて、神秘の究極まで至ってはいない、とわたしは思います。そういう漠然さがあっても、人間を小さくしてしまいう世界の見方は、いわば正攻法で世界をとらえよう

とする立場の困難をひとまずわきにおいて、世界の別な見方を提供するという点で、捨てがたい有効性を発揮します。この有効性は、プラトンなどのギリシア哲学に対しても当てはまるのではないでしょうか。『莊子』は、わたしが探求したい「人間の生き方」を思索するのにも多くの材料を提供してくれると思います。だから、わたしはそれをさらに読まなければいけないのですが、このノートではそれを今後の宿題としておきます。

C この世界を超越して安心を求める 宗教

第1節で、人類の文明が開花してから古代人の心がどのような経過をたどってきたか拙く思い描いてみました。この世界で目にする印象深い事物に「靈性を感じる」のは人の心性ですね。アニミズムから近世の宗教まで様相は変化しましたが、人類は社会的な生き物ですから共通の解釈は共同体に根付き、政治的に編成された社会は宗教的な世界観・人間観を考え方や行動様式の一部として保ちました。文明の歩みとともに人間の理性あるいは知性が発達しても、宗教は影響力を失うことはありませんでした。

社会に根づいた宗教は、人ごとに影響力の強弱に差があったとしても一般に人々の規範となつて、その規範から大きく乖離した言動をすることを防いだのだと思われます。そし

て、世界宗教と呼ばれるような宗教は、道徳的な規範をかけた、会堂で人々に教えを説くことも行なわれたので、信者の生き方にずっと一定の効果を与えてきました。

ただし、基本において世界に精神性があると信じる宗教は、事物・事象に靈性を認める古来の言動を温存してきた、と言えるでしょう。宗教が「呪術的」な側面を抜け出ることには困難なのです。土俗性をなお保存している中国の道教や日本の神道、おそらくインドのヒンドゥー教などはその傾向を強くもっていると思います。キリスト教でも中世までのカトリック教会はその傾向をもっていました。わたしは宗教のそういう呪術的な側面を尊重することができません。『莊子』の語り方をみれば、莊周さん、あなたもわたしのこの観点を支持されることでしょう。

ところで、偉大と思う人への尊敬が崇拜にまで高まるということは、人間の心性にありがちなことです。たとえばインドでは、ゴータマ・シッダールタを「悟った人ブッダ」と仰いで崇拜するようになりました。そして、ブッダは人を「救う」力をもつという信仰に変化していききました。そして、ブッダは衆生を救う「仏」になりました。宗教となつて仏教哲学は大きな広がりをもつようになったと聞きますが、信仰の面で原始仏典の教義はいわゆる「大乘仏教」に拡大し、より普遍性をもつ救済の「仏」が誕生しました。キリスト

教も、イエスを「キリスト」と呼んで崇拜するようになったところは仏教に似ています。でも、それはユダヤ教の唯一神を信じる集団から派生したので、イエスをその人格神と同一視する方向へ進みました。仏教は仏の慈悲を説き、キリスト教はキリストの慈愛を説いて、人々（の魂）を救済するという要点で似ているということが出来ます。イスラーム教も同様の側面をもつのでしょうか。じつは、『コーラン』を読んだわたしはこの要点を読みとることができなかったのですが。

宗教的な立場に関して、修養が足りなかったと悟ったわたしが世界観や生き方を思索するこのノートで注目すべきなのは、世界宗教の中核にあるこの「救済」というテーマです。とくに、敬虔な信者に与える信仰の力をよく知ることが大事だろうと思います。

3 近世までの世界観・人間観の変遷

中世・近世の世界観・人間観と生き方のことを飛び抜かしてはいけないうえ。その時代を懸命に生きた人々も、世界の見方を養って生き方を模索しなかったはずはありません。現代のわたしたちはそれを受け継いでいるのです。もう一つ節を立てて整理し考えておくことが必要でしょう。歴史にもまれて、人間たちの思想は多様な様相を呈したように

見えます。それを探求するのはやはりむずかしい仕事だけど、莊周さん、いつものように無手勝流でやってみます。

宗教については前節ですでに中世までのことに触れていますが、近世末までの全般的な世界観・人間観の変遷のなかでとらえなおしておくことは有益でしょう。

インドで、ゴータマの思想はまもなく仏教のなかに吸収されたので、小節1Aの立場は背景に退きました。くりかえしをいとわず言えば、「目覚めに到達したブッダ」という言葉がすでに理念で、「彼岸」の人として崇拜の対象になり、元来あった「人間の苦しみからの脱出」の追求は「魂の救済」に収束して、アトマンは存在しないという考えがあいまいになりました。そして、ブディズムは結局宗教になったのだと判断します。その思想の変遷は仏教哲学の推移として現われているのだと思います。「救済」の願望は新しい要素を加上し、いわゆる大乘仏教が派生しました。大乘仏教ではキリスト教のような衆生を救済する仏が表象され、悟って「仏」になれば苦しむ衆生を救うことができるという理想まで出現しました。仏教晚期、「教学」が飽和状態になり宗教としてもヒンドゥー教に吸収される衰勢になったとき密教がつくりだされた、と思われまふ。でも、この見方は非難をうけるのでしょうか。密教に至ると、原始仏教にはなかった呪術が取り入れられるように

なりました。仏教で現世利益を求めて加持祈禱するのはその流れでしょう、

中国にはインドとはまたちがった思想史があったようですね。孔丘・孟軻の儒学は漢代以来中華帝国の正統な教学ということにされて、思想の自由な展開に影を落としました。でも、老荘の道家の思想は根強く生き延びたんですね。そして、インドから伝来した仏教は、東アジア流の浄土教になり、また老荘流の思考スタイルを取りこんだ禪宗を生みしました。世界に先駆けて文明を発展させた宋代の中国では、思想の面で変化が起きました。政治や社会生活上の道德を説くことを中心課題としていた儒学が、老荘の学や仏教思想の影響を受けて拡張され新儒学に変化しました。明・清代にはこちらの新儒学が正統な教学ということになりました。

代表的な朱熹の哲学は「朱子学」と呼ばれます。「存在」を、天地万物を貫く法則を意味する「理」と万物を構成する「氣」によつて説明する体系になっています。この考え方は儒学本来の倫理道德に結合されて、人間のことを考えるときには「理」は「性」と同じこととされ、人間のもつて生まれた「本性」は「天の理」であると考えられます。儒学は朱子学によつて、人事を中心とする思想から世界と人間を考えるように拡張されたのですね。「格物致知」や「格物窮理」という言葉が、事物一般を考究して「知」に至り、また

「理」を修得し「本性」にもどって人格を向上させる、という考えを表わしています。明代になると、朱子学を批判する王陽明が「心即理」あるいは「知行合一」を強調して実践倫理を説く「心学」を唱道しました。

ヨーロッパの哲学ほどの多様さをもっていなかった中国で、新儒学は、世界観を広げ、人間の生き方に文明の進んだ時代にふさわしい多様性を与えたのでしょうか。この問題はこのノートのテーマとして重要ですが、わたしにはこれ以上意味のある議論をする力がありません。代わりに、生き方を修養する必要があると考えたわたしが優れた人の伝記を読もうとしていることに触れましょう。理性的な中国人として北宋時代の蘇軾に学ぼうとして、林語堂著『蘇東坡』を読みました。知性的でしかも楽天家の蘇軾の生き方に学ぶべきところがあると思いました。そのとき、前段で触れた中国宋代の思想史の一端を知ることでもできました。中国伝統の学を徹底的に学習していた蘇軾は、仏教にも傾倒し、古来の道教の神仙思想も捨てきれない十一世紀の人だったのですね。

日本には密教までの大乘仏教が伝来しましたが、日本流の社会状態に落ち着いた中世になると、救済の願いをつき詰めた浄土教が生み出されました。同じ時代に中国的な思考法と実践法をとり入れた禅も招来されました。これらを、ヨーロッパに先駆ける日本の宗教

改革と見なすことも可能でしょう。信仰を純化して人々の生き方に影響を与えたように思われます。近世になると新儒学が導入され、制度的に正統な教学とされました。それは、文明の進展度に見合った世界観をもつことに寄与し、立派な生き方を追求する態度を養ったということが出来ます。そこでは、「理・氣」の学の探求による世界把握と「理・性」の修養によって生き方を確立することが追求されたのです。それが身に着いた人がいたように見えます。現代からふりかえてみると、そういう人のなかに品性優れた人がいた、とわたしには思えます。もともと合理性を尊ぶ中国で、儒学者がインドに源流をもつ仏の救済を信仰することは少なかつたようです。日本でも、新儒学を学んだ学者が檀家制度で体制に取りこまれた仏教を尊敬することは少なかつたと見えます。それでも仏教は生活に結びついていましたが、一方で新儒学の考え方があり、他方で古来の神社信仰も続いて、両者は日本人を現世的な考え方と行動に導いたと思います。ここで、十八世紀の日本に、先駆的にインド・中国・日本を比較思想的に論じた富永仲基がいたことに触れておきましょう。ここまでのインド・中国・日本の思想についての理解の一助になると思います。

こう学習すると感慨を抱きます。日本で、江戸時代から明治初期までの学者は新儒学を学びました。「理」・「氣」・「性」など新儒学の概念を内包する語が現代でも日本人の

語彙の重要な部分を占め、わたしもそれらの語彙に基づいて思考して、現にこのノートにもそれを含む合成語が現われます。新儒学をよく学習した幕末明治期の先人たちが、ヨーロッパの新しい思想を取りこむのに、新儒学のことばを活用して翻訳語をつくってくれたおかげで、現代の日本人は抽象的な思考をすることができるようになりました。日本で生まれたそういう漢字合成語がUターンして現代中国でも使われているのはおもしろいですね。

ギリシア・ローマのエピクロス派やストア派の哲学はいわば「人生哲学」になり、ヨーロッパに引き継がれ、中世の賢人たちもその思想を学びましたが、キリスト教がローマ帝国の国教とされて以後、世界観と生き方の指針としてキリスト教が主要な地位を占めました。それでも、ヨーロッパでは多くの独立した国々が競争しながらも濃密な交流を保って、思想において前進する条件があったように思われます。近世になると、地中海貿易の進展に促されてルネサンスと呼ばれる機運が興り、それはのちに大西洋から全世界に広がる人の移動となりました。文化面で、アラビア語で書かれたギリシアの哲学書の翻訳、宗教改革、科学の発展などによって、ヨーロッパ文明は勃興を始めました。それは、宗教から自由になった思想を育て、啓蒙の時代へと推移していきました。このとき、中国に滞在した宣教師たちの紹介した人格神をとまなわなない「理・性」概念に拠る新儒学が、ヨーロッパ

の啓蒙思想に寄与した、という議論を読んだことがあります。

こうして近世ヨーロッパで、宗教に束縛されずに世界観を探索し生き方を模索することが前面に出るようになりました。わたしは伝記で賢人の生き方を学ぶ一環として、尊敬するM・モンテーニュのことを書いたA・ジイドの『モンテーニュ論』を読みました。あのさまさまに自分の生き方を模索した『エッセー』について、自身も無神論者であるジイドが、モンテーニュもほんとうは神を信じていなかったと論じています。しかし、代数幾何学を発明し他方で近代哲学への道を切り開いたR・デカルトは、神の存在証明をしようとした。そのあと、パスカルの原理を発見したB・パスカルは修道院に入って信仰の道を歩みました。B・スピノザは神を「世界の果て」に置く汎神論的な思想に至りました。微積分学を発明したG・ライプニッツも、合理的な思考を貫こうとしましたが、形而上学的不公平から離れることはありませんでした。ここでイギリスの経験論などを上げないのは不公平でしょうか。それぞれが世界を理解し生き方を学ぶ優れた探求でしたが、近代的な考え方にまでは至っていなかった、ととらえることができます。

冗長な駄弁を弄しました。でも、日本の古くからの思想だけでなく仏教・新儒教は、現代のわたしたちの世界観と生き方の根元にありますから、それを記憶にとどめることは必

要です。また、ヨーロッパについては、次の章で近代思想に取り組むための伏線のつもりです。近世までの人間の歩みを整理しようとしたのは、人間たちが行なってきたそれらのことが、近代以降の人間の世界観や生き方の基底に横たわっている、と考えるからです。それぞれもつと学ぶ必要がありますが、今のわたしにはそれを宿題とすることしかできません。宿題ばかり増やして、莊周さんにまたからかわれるでしょうが。

二〇二二年、三月